

文法化研究とは何か¹

宮下 博幸

言語研究会の会報は、本号で第 10 号を迎える。この第 10 号発行の節目に合わせ、共通テーマによる特集を組むことになった。議論の結果、その特集テーマとして選ばれたのが、近年しばしば話題となる、「文法化」である。

文法化 (grammaticalization) とは、文法が生じてくるプロセスを指す用語である²。文法化の研究は、古くは 19 世紀の歴史・比較言語学の伝統の中にさかのぼることができるが³、近年ではとりわけ 1980 年頃から、欧米で研究が盛んに行われるようになった言語学の一分野である。しかし以下で見るように、近年の文法化研究には、その目標設定に関して、歴史・比較言語学的な文法研究とは大きく異なる部分も観察される。本稿は特集テーマの「文法化」に関係する論考に先立って、文法化とはどのような現象を指すのか、またどのような特徴を有するのかについて整理し、さらに文法化研究の特徴はどのようなものであり、そこではどのようなことが主張されてきたのかを、最近の動向も含めて概説するものである。また最後に、今後の文法化研究の展望についても簡単に言及したい。

¹ 本稿は 2004 年 11 月 27 日に行われた、日本独文学会北陸支部 2004 年度研究発表会における口頭発表「文法化研究の発展と展望」に基づきつつ、大幅に加筆したものである。

² 文法化という用語は、フランスの言語学者 Meillet (1912) によって初めて使われたものとされる。以下の甲斐崎氏による同論文の日本語翻訳を参照されたい。

³ 文法化研究の源流に関しては、Lehmann (1995[1982]:1-8), Heine et al. (1991:5-11), Hopper/Traugott (2003:19-25) などを参照。

1. 文法化と文法化研究

文法化とはその名の通り、文法が生じてくるプロセスを指す用語であり、文法化研究とは、そのようなプロセス全体を明らかにする研究分野である。つまり文法化研究は、我々が目にする言語の文法はどのようにして生まれ、定着してゆくのかといった問いかけに答え、文法がなぜ今あるような姿をしているのかを説明しようとする、言語学の諸分野の中でもとりわけ興味の尽きない研究分野だと言える。

文法化とは何かを考える際、まずその基礎となるのは、「文法化」という言葉の中に含まれる「文法」とは何を指すか、ということであろう。「文法」をどのようなものと捉えるかによって、文法化研究で問題となる現象の範囲が異なってくるからである。

文法はまず形態論的な視点から捉えることができる。この見方に従うと、文法は語彙のような拡大可能なクラスではなく、ある限定された数の要素からなる、いわゆる閉じたクラスの形態素⁴の集合とみなすことができる。例えば日本語の格助詞や、「見た」の「た」や「食べている」の「ている」のような時制・アスペクトの標識は、文法機能を担う言語形式だと言える。このような形態論的な文法の捉え方に立つと、文法化とは開いたクラスに属する形式が、格助詞や時制・アスペクト標識のような閉じたクラスに属する形式へ、さらには閉じたクラスに属する形式が、別のさらに閉じたクラスの形式へと変化する過程と捉えることができる⁵。

しかし一般に文法として理解される現象に含まれるのは形態論にとどまるものではない。統語論で問題となる文の構成要素の配列に関する規則も、文法のもう一つの重要な側面である⁶。したがって文法化の研究はある統語構造がどのように生まれてくるのかという問題にも関わることになる⁷。

⁴ これはしばしば、語彙素 (lexem) に対して文法素 (gram) と呼ばれる。

⁵ このような文法化の捉え方は、Meillet (1912) 以降、広く見られるものである。文法化研究では、文法化の流れが大局的に見てレキシコンから文法へと進んでゆくと把握されることも多い。その際、両者の境界は連続的なものと見なされる。

⁶ もちろん形態論とこのような意味での統語論がはっきりと区別されない言語もある。

⁷ 文法化研究はこれまでどちらかという形態論的な文法観に基づいて展開してき

以上のように、文法化は文法の中身に即して捉えることができる。そして以上のような言語における文法がいかに生じてくるのかを明らかにするのが、文法化研究の課題となる。

2. 言語変化と文法化

ここで文法化と他の言語変化の関係を簡単に考察してみたい。文法化は文法が開いたクラスに属する語彙や、すでにある文法要素から生じてくる過程だといえるが、言語変化はもちろん文法以外のレベルでももちろん観察される。むしろ言語変化の研究の中で 19 世紀以来、主要な研究対象とされてきたのが音韻の変化である。音韻変化は青年文法学派の主要な関心の対象であった。その際には音韻変化の規則性が注目され、ある言語において音韻変化が起こると、それは例外なくその言語の全体に及ぶと考えられた⁸。

また語彙における変化では、ある語彙の意味がどのように変遷してきたかが考察の対象となってきた。そこでは特に変化する前の意味が、変化した後の意味に比してどのような特徴を持ちうるのかが明らかにされてきた⁹。

一方、文法のレベルでの変化の際には、二つの大きな特徴が観察される。まず文法的な変化においては、語彙のレベルでの変化の場合と同じく、意味変化を伴うことが挙げられる¹⁰。例えば上で挙げた現代日本語の「た」は、その起源である完了・存続の助動詞「たり」に比べ、過去時制の標識としての機能が強まっている。この文法上の変化は、したがって意味の変化とも捉えることが可能である。文法レベルの変化のもう一つの特徴は、音韻変化に似て、ある種の規則性が観察されるというこ

たが、統語的な側面の文法化に注目した研究としては、例えば Li/Thompson (1974) の中国語の統語構造の歴史的变化 (SVO > SOV) を扱った研究などが挙げられる。なお、この研究は中国語の目的語を取り立てる構文、いわゆる「把構文」を扱ったものである。

⁸ 19 世紀のインドヨーロッパ語族の音韻変化の研究史に関しては、風間 (1978) を参照。

⁹ 通時的な意味変化を扱う歴史的意味論については、Ullmann (1962) を参照。

¹⁰ この点に関して、文法化研究は歴史的意味論と共通の基盤をもっていると言える。文法化研究でしばしば取り上げられる、メタファーやメトニミー的な用法の拡大は、語の意味の変化にも同様に当てはまるプロセスである。

とである。すなわち文法的な変化が起きる際には、変化が起きる前に比べ、よりいっそう文法的な機能をもつ形式へと変化してゆくのである¹¹。そしてこの変化は一方向であり、通常は逆行することはない(文法化の一方向性の仮説)。したがって、例えば過去を表す「た」が、再び「たり」になったりすることはないということになる。このように文法における変化は、意味や形式が複雑に絡みあう点で、言語変化の中でもとりわけ興味深い特徴を有すると言える。

3. 文法化研究の特徴

文法の通時的変化の研究は、「文法化」という標語の元に研究が行われるより以前に、歴史的統語研究という形で行われてきた¹²。このような研究と、1980年代より盛んになってきた近年の文法化研究とは、どのような違いがあるのだろうか。ここでは両者の相違を観察することで、近年の文法化研究の特徴について考察してみたい。

歴史的統語研究は、ある言語、もしくは系統を同じくする諸言語の文法の変化を記述するのが大きな目標であったと考えられる。それに対して文法化研究で目標とされるのは単に記述的な文法変化を明らかにすることにとどまらない。そこではさらに言語類型論¹³的な視点から、世界の言語にどのような文法変化のパターンがあるのかを明らかにすることが目指される¹⁴。この点において文法化研究の目標設定は、従来の歴史的統語研究とは大きく異なるものである。またこのような言語類型論的な研究方向の中で指摘されるのが、上で述べたような、文法化は一方向に進んでゆくという認識(一方向性の仮説)である。以下で見るように、この仮説は近年その反例が指摘されたりしているものの、大局においては正しいと考えられる。これは文法化研究の最も重要な仮説の一つと言える。

¹¹ このような方向性は語彙の意味変化にも見られるが、文法の変化の方向性に比べると限定的であるといえる。語彙的な意味変化の規則性については Traugott/Dasher (2002) を参照。

¹² 例えばドイツ語の文法の歴史的研究に関しては、Behaghel (1923-1932) を参照。

¹³ 言語類型論とは、世界の言語の構造の多様性や普遍性を探ることを目標として掲げる、言語学の一分野である。

¹⁴ このような方向の代表的な研究としては、Bybee et al. (1994) や Heine/Kuteva (2002) が挙げられる。

文法化研究に見られるさらなる特徴は、文法化が生じてくる背後にある、言語使用者の認知的プロセスについても、考察が行われる点である。つまり文法化研究においては、文法が言語使用者のどのような営みによって生じてくるのかについても重要な研究対象となる。このような考察は人間の認知の考察と密接に関わるものとなる。そのため文法化研究はしばしば認知言語学の歴史的研究への応用ともみなされる。このような方向性も、従来の歴史的統語研究の中では意識的な形では見られなかったものである。

さらに文法化研究の特徴として、ソシュール以来の通時論と共時論を明確に区別する言語学研究の伝統には従わないという点が挙げられよう（汎時論的立場）。文法化研究においては、共時的に観察される文法構造は通時的な文法化の結果であり、共時的な文法構造も通時的考察によって最もよく説明されると考えられる。またそこからさらに一步進んで、共時的な構造の中から、通時的な文法化の過程を導き出そうとする方向の研究も生まれてくる¹⁵。

以上のように、近年の文法化研究は言語類型論や認知言語学といった分野と密接に関わるような形で行なわれる¹⁶という点で、それ以前の文法変化の研究とは大きく異なっている。そこには言語類型論的な意味での言語普遍性と、その普遍性の認知的動機付けの探求という方向性が見て取れる。またこのような方向性ゆえに、文法化研究は現代言語学のアクチュアルな研究領域の一つをなしていると言える。

4. 古典的文法化理論

冒頭で文法化とはどのようなものかについて簡単に述べたが、ここでは70年代以降のすでに古典と呼ぶいくつかの文法化理論¹⁷について紹介したい。

¹⁵ 通時的な文法化の過程は、共時的にはコンテキストにおけるバリエーションの形で現れる。それゆえ共時的研究では、文法化する形式のコンテキストとの関わりが特に考察の対象となる。文法化とコンテキストの関わりは、近年注目されているテーマである。例えば Diewald (2002) や Heine (2002) を参照。

¹⁶ 近年では生成文法の枠組みから文法化を捉えようとする研究も見られる。例えば Roberts/ Roussou (1999, 2003) や van Gelderen (2004) 参照。

¹⁷ ここで文法化理論と呼ぶものは、かならずしも厳密な意味での理論を指すわけではなく、むしろ文法化をどのように把握するかについての見解である。

まず現在の文法化理論のさきがけと見なされるのが、Givón (1971:413) の「今日の形態論は昨日の統語論である」(Today's morphology is yesterday's syntax) という見方である。この標語は歴史的に見ると本来は統語な結合であったものが、次第に融合して行って形態論の領域に移行していくというプロセスを指すものである。このようなプロセスは、文法が生み出される言語変化の至るところに見られる。例えばすでに上で挙げた助動詞「たり」は、接続助詞「て」¹⁸と存在を表す動詞「あり」が融合したものであることが知られている。この「てあり」から「たり」への変化は、統語的な結合であった「て・あり」が「たり」という助動詞となることで、助動詞の形態論の領域へと移行したものだといえる。他の有名な例としては、ラテン語の不定詞と所有動詞の統語的結合 *cantare habemus* (歌う・不定詞 私たちは持つ) が、ラテン語から派生したフランス語においては *chanterons*「私たちは歌うだろう」となり、未来形の形態論的なパラダイムを形成するようになったという例が挙げられよう。Givón の以上の標語は、形態の文法領域が、統語の領域から生まれてくるといふ、言語変化のダイナミズムを明示したものだといえる。

Givón (1979) は、これをさらに拡大して、以下のようにまとめている。

(1) 談話 (discourse) > 統語 (syntax) > 形態 (morphology) > 形態音韻 (morphophonemics) > ゼロ (zero)

ここでは統語構造がさらに談話の中から生じてくるといふプロセスと、形態論が形態音韻の領域へ、さらにはゼロへと変化してゆくプロセスが加えられている。Givón は特にこのうちの前半のプロセスを統語化 (syntacticization) と呼び、詳しく取り上げている¹⁹。このようなプロセスの一例と考えられるのは、例えば英語に見られる次のようなものである (Givón 1979:219)。

(2) I know that, (i.e.,) it is true. > I know that it is true.

¹⁸ また「て」は本来、完了の助動詞「つ」の連用形であったとされる。

¹⁹ それに対し統語から形態への流れは、形態化 (morphologization) と呼ばれている。

このプロセスの最初の段階をなすのは、左の例のように最初の文の代名詞が後方照応的に先取りして表れ、それに続く文が、その内容となるような構造である。この段階の構造は、談話レベルの照応関係で成り立っているといえる。一方、この構造の統語化が進むと、右の例のように代名詞はもはや照応詞ではなく、補文接続詞として解釈される。この段階では、that は文の統語構造(すなわち埋め込み)を作り出す機能語となっている。

以上の Givón の研究は、文法が出来上がってくるプロセスを非常に大きなスケールで捉えようとした点が特徴であるといえる。このような文法に対する見方はまた、当時主流であった共時的研究のみに基づく言語学説明へのアンチテーゼであったとも言うことができるだろう。

文法化が (1) で示されているような方向に進行していくという指摘は、その後の研究に大きな刺激を与え、またこのような見方は現在も文法化研究の重要な主張のひとつとなっている。しかし上のような文法化の捉え方では、ある形式がどのような状態になると文法化したと言えるのかは、必ずしも明確ではない。ある形式の文法化の程度は、何らかの基準に基づいて判断する必要がある。そのような文法化の程度を計る判断基準はどのようなものだろうか。この点に関して Lehmann (1995[1982])²⁰ は、文法化の度合いを測るためには記号の自立性の程度が基準となると考え、文法化の程度を、自立性を計るパラメータの組み合わせで捉えることを提案している。そのパラメータとして挙げられるのが、「重点性」、「結束性」、「可変性」の三つと、ソシユール以来よく知られた区別である「範列的」、「統辞的」²¹の二つである。これらのパラメータを組み合わせた6つの基準により、文法化の程度が把握できると Lehmann は考えている。これは次のようにまとめられる (Lehmann 1995[1982]:123)。

²⁰ この本は1982年に、ドイツ・ケルン大学言語学研究所の Hansjakob Seiler が率いる、ケルン言語普遍プロジェクトのワーキングペーパーとして刊行された。その後、長い間正式に出版されず、入手が困難な状況が続いていたが、原著に多少手を入れた形で1995年に Lincom より出版された。

²¹ これは syntagmatic の訳である。本稿では「統語(的)」という用語も用いているが、syntagmatic の訳の際には、「統辞的」を用いることにする。

	範列的 (paradigmatic)	統辞的 (syntagmatic)
重点性 (weight)	完全度 (integrity)	構造スコープ度 (structural scope)
結束性 (cohesion)	範列度 (paradigmaticity)	結合度 (bondedness)
可変性 (variability)	範列的可変度 (paradigmatic variability)	統辞的可変度 (syntagmatic variability)

まず範列的な軸から見てみたい。最初に挙げられている範列的重点性、すなわち完全度とは、ある記号が、他の同じクラスに属する(すなわち範列的關係にある)記号と比べて、意味的、音韻的にどの程度完全であるかに関わるものである。例えば「てあり」と「たり」を比較すると、「てあり」の方が「あり」という存在の意味を持つ語彙を含んでおり、音韻的にも完全である分、完全度が高いことになる。完全度はしたがって文法化が進めば進むほど減少すると言える。

次の範列的結束性、すなわち範列度は、ある記号が言語の変化パラダイムのなかにどの程度組み込まれているのかに関わるものである。ある記号の文法化が進めば進むほど、範列度は高くなるとされる。例えば「たり」を連用形に接続する助動詞のパラダイムの一員であると考えれば、動詞を含む「てあり」に比べて範列度が高く、文法化の度合いが高いと言えるだろう。

範列的な軸の最後は、範列的可変度である。これはある記号が文法化した場合の、範列上の自由度や義務的度合いに関わる。例えば「てあり」の段階では、「てはべり」などのように範列的な置き換えが可能であったはずであるが、現代語の「た」は過去を表す場合にほぼ義務的に用いられる形態素になっており、「行った」「書いた」のように、音韻的に本来の動詞の語形が保たれない場合もあり、他の要素との範列的な置き換えは限定されている。

次に統辞的な軸についてである。統辞的重点性、すなわち構造スコープ度は、ある記号がそれと統辞的關係にある他の要素とどの程度の重点性の差があるのかに関わるものと考えられる。例えば「行きてあり」という統辞關係の段階では、「行きてあり」の「てあり」の意味はその音韻的な形とともに統辞的にみてまだ重点性が見て取れるが、「行きたり」

の場合は、すでに意味的、音韻的に「行き」の方に重点が置かれるようになっていく。

次の結合度は、ある記号が他の記号とどの程度緊密に結合しているかに関わるものである。例えば「てあり」の段階では「て」「あり」と分割可能だが、「たり」は分割できずすでに一つの単位となっているといった例が、この結合度の違いを示すものとして挙げられよう。この結合度が高いほど、文法化の度合いは高くなる。

この軸の最後の基準である統辞的可変度は、統辞的な自由度に関わるものである。この例として Lehmann (1995[1982]:158) が挙げているのは、古典ラテン語の不定詞と所有動詞の統辞的結合 *epistulam scriptam habeo* 「書かれた手紙を私は持っている」である。古典ラテン語ではこの結合は統辞的に見て自由度があり、さまざまな語順が可能であったという。しかしそこから派生したイタリア語の対応表現 *ho scritto una lettera* 「私は手紙を書いた」では、もはやそれぞれの要素の語順は固定されている。イタリア語ではもはや統辞的な自由度は見られなくなっていることから、ラテン語に比べて文法化の度合いが高くなっていると言える。

以上の Lehmann のいくつかのパラメータについては、文法化のパラメータとして有効かどうか疑問視されることもあるものの²²、以上で見てきたようなパラメータにより、ある形式がどの程度文法化しているのかを把握しようとする試みは、文法化研究に対する重要な貢献であったと言える。

Lehmann とほぼ同時期に、Heine/ Reh (1984)²³ は主にアフリカの諸言語を対象として文法化の研究を行なっている。この研究において Heine らは文法化に関わる三つのプロセスを区別し、文法化の際にはこれらの独立したプロセスがそれぞれ関与すると考える。そのプロセスとは以下のものである。

²² Diewald (1997:23) や Hopper/Traugott (2003:31f.) を参照。

²³ Lehmann も Heine のグループの研究も、対象言語は異なるものの、共にケルン言語学研究所の Seiler のプロジェクトに源を発している。ヨーロッパの文法化研究は、Hagège (1993) のような独自に文法化研究を推し進めた言語学者もいるものの、まずケルンを中心に展開されてきたと言ってよい。

(3) 文法化に関わる三つのプロセス (Heine/Reh 1984:16)

- I. 音声のプロセス
- II. 形態統語的プロセス
- III. 機能的プロセス

まず文法化の際には、音声レベルにおいて変化が観察される。その際には形式の持つ音声的な実質が失われていく傾向が見られる。このプロセスは侵食 (erosion) や磨耗などと呼ぶことができるものである。「てあり」が「たり」へと音声的に変化してゆく過程には、この音声のプロセスが関わっている言うことができる²⁴。

また文法化の際には形態統語的な側面においても変化が見られる。ある形式が文法化すると、それは接語化 (cliticization) や接辞化 (affixation) などの特徴を示すようになる。例えば「てあり」から「たり」への変化の過程では、「たり」は「助動詞」と呼ばれる、一種の動詞接辞となったとすることができる²⁵。

さらに機能の面では、文法化により意味の抽象化 (desemanticization) が見られるとされる²⁶。例えば「てあり」においては「あり」の存在の意味が多少なりとも残っていたと考えられるが、「たり」の段階ではいわゆる「完了・存続」という、より抽象的な意味に変化している。

以上のように、Heine/Reh は三つのプロセスを基準として、文法化を捉えようとしている。Lehmann とは異なり、言語形式の持つ音声・形態統語・機能の特徴を明確に区別して文法化を捉えようとする点で、非

²⁴ Heine/Rehは、音声プロセスとして侵食の他に、適応 (adaptation)、融合 (fusion)、消失 (loss) を挙げている。しかし Heine の後の研究 (例えば Heine/Kuteva 2002) では、侵食が音声のプロセスを代表する扱いを受けているため、ここでも侵食のみに触れるに留める。

²⁵ Heine/Reh は、形態統語的プロセスとして、他に交替 (permutation)、複合 (compounding)、化石化 (fossilization) を挙げている。なお Heine/Kuteva (2002:2) はこのプロセスを脱カテゴリー化 (decategoryalization) と呼んでいる。

²⁶ これと似た概念の、文法化の際の意味の漂白化 (semantic bleaching) に関しては、Sweetser (1988) を参照。なお機能的プロセスに関しても、他に拡張 (extension)、単純化 (simplification)、意味融合 (merger) が挙げられている。また、後の Heine/Kuteva (2002:2) では、意味の抽象化と拡張がそれぞれ別の文法化のプロセスとして扱われている。

常に理解しやすいものとなっている²⁷。

さて、以上の Lehmann や Heine らの文法化へのアプローチは、文法化する形式の音韻的、形態統語的な側面をも重視しつつ文法化を把握しようと試みたものだと言える。このような文法化の捉え方と並んで、主に意味の側面から文法化を考察しようとする一連の研究がある。そういった研究では、具体的な意味が文法的な意味へと変化してゆく際にどのような変化の傾向があるのかに、とりわけ関心が払われる。

このような方向の代表の一人である Traugott (1982) は、文法化の際に見られる意味変化の一般的な傾向として、次のようなものを挙げている。

(4) 命題的 (propositional) > テクスト的 (textual) > 感情表出的 (expressive)

このような傾向を示す変化は、さまざまな言語に見られると考えられるが、ここでは日本語の例を挙げてみよう (Matsumoto 1988:340 を参照)。

(5) 太郎は若い_が、よくやるよ。 > 太郎は若い(よ)_が、よくやるよ。

左の文に見られるように、「が」は本来、二つの命題を逆説的に連結する働きをする接続助詞であった。しかし右の新しい用法では、それが独立して、談話標識というテキスト的な機能を帯びている。ここに見られる用法の拡大はしたがって命題的な用法からテキスト的な用法への変化と捉えることができる²⁸。

また Sweetser (1990) はモダリティ表現を考察し、次のような文法化の

²⁷ 文法化をこのように捉えると、この3つのプロセスが相互にどのような関係にあるのかという問題が浮かびあがってくる。Heine/Reh はこのうちで意味のプロセスが他のプロセスに先行すると考えている。これらのプロセスの順序に関する議論は Newmeyer (1998:248ff.) を参照。

²⁸ このような例は意味を中心として文法化を捉える Traugott のような立場に立つと文法化の一例ということになるが、文法化を形式的に捉えようとする立場からすると、文法化の程度を測る基準の一つである結合度が緩くなる方向の変化ということで、文法化の問題例となる。この点に関してはまた Hopper/Traugott (2003:209ff.) を参照。

傾向を挙げている²⁹。

(6) 義務的モダリティ (deontic modality) > 認識的モダリティ (epistemic modality)

このような変化の例としては、英語の *must* の「しなければいけない」という義務的なモダリティから、「に違いない」という認識的モダリティへの変化が挙げられる。Sweetser はこの変化を、社会・物理的領域から認識的領域へのメタファーの適用の観点から説明している。

さらに Heine et al. (1991) は、意味のレベルにおける次のような文法化の方向性を指摘している。

(7) 人 (PERSON) > 対象物 (OBJECT) > 活動 (ACTIVITY) > 空間 (SPACE) > 時間 (TIME) > 質 (QUALITY)

ここに示される方向の典型的な例としては、英語に見られるように「背中」といった身体部位 (人) を表す語が、「後ろ」という空間を表す表現へと文法化してゆくような場合が挙げられる。

以上の意味に基づくアプローチは、文法化の起点となる意味から、目標となる意味への変化の際に、どのような一方向性が確認できるかを広く探求するものと位置づけることができる。このような方向の研究は、さらに Bybee et al. (1994) によって進められた。このグループは世界の 76 言語を対象として、時制、アスペクト、モダリティに関する文法化の方向性を明らかにした。そこでは世界の言語に見られるこれらの領域の文法化の道筋が詳述されている。また最近では、これまでに明らかにされた、さまざまな文法化の道筋を包括する試みを Heine/Kuteva (2002) が行っている。

さて、以上で見た一方向の変化は、いったいなぜ起こるのだろうか。言語においてこのような変化が起こるのは、その言語の話し手や聞き手が何らかの形で介在しているからであると考えられる。また言語類型論的な方法を採用する文法化研究である Bybee et al. (1994) などが明らかに

²⁹ この方向性は、Traugott (1989) によっても指摘されている。しかし Traugott は Sweetser とは異なり、意味の語用論的強化の観点から説明を行っている。

したように、多くの言語に同様の方向性が見られるとすると、そのような介在の仕方はさまざまな言語共同体に共通するような基盤に基づいていると考えられる。そのような基盤とは、人の認知様式やコミュニケーション様式だと考えられる。ではこのような変化が起こる背後には、具体的に話し手・聞き手のどのような認知・コミュニケーション上のプロセスが介在しているのであろうか。

文法化の際の意味の変化の際に関わる認知プロセスに関しても、これまで活発な議論が行われている。そのようなプロセスとしてこれまで指摘されてきたのは、とりわけメタファーによる拡大と語用論的推論による拡大という、二つの一般的なプロセスである。

メタファーとは異なった領域に属するものを、別の領域のものに見立てる認知プロセスである。例えば多くの言語において、「頭」が上、「背中」が後ろを指す表現となる例に見られるように、身体部位が空間の表現へと転用されてゆくプロセスは、身体部位を空間表現へとメタファー的に拡大したものと捉えることができる。このようなプロセスの背後には、話し手が聞き手に対し抽象的なものごとを表現するのに、よりわかりやすい具体的な領域のものごとに依拠して話すという傾向があると言えるだろう。

もう一つの重要なプロセスとされる語用論的推論は、あるコンテキストにおいてある形式が使われる際に生じてくる推意が、しだいにその形式の意味として定着してゆく過程である (Traugott/König 1991 参照)。このようなプロセスのよく知られた一例としては、英語の *since* (古英語 *sippan*) が本来「～以来」といった時間の意味で使われたものが、状態的なコンテキストで使われることにより、次第に理由の意味が定着していったという例が挙げられる (秋元 2001 参照)。このプロセスに背後には、聞き手が話し手の表現をコンテキストに応じて理解し、その中にそこから引き出される新しい意味を読み込んで、その用法をさらに話し手として積極的に使用してゆく傾向が存在すると考えられる。

以上の二つの認知プロセスは基本的に互いに別のものと捉えることができるものの、Heine et al. (1991) も指摘しているように、文法化の際には両方のプロセスが関わることが多い。またこの二つは対立するものではなく、実際は相補的なもので、メタファーは二つの異なる領域を結

びつけ、語用論的推論はその間に見られる段階を結びつけるプロセスだと捉えることができる³⁰。

以上のプロセスは、主として話し手・聞き手の間の意味的なやり取りを反映した文法化のメカニズムと捉えることができる。それに対して、言語構造を主要な契機として文法化のメカニズムを把握する立場もある。Hopper/Traugott (2003:51) の次の例を見てみたい。

(8) [[back] of the barn] > [[back of] the barn]

ここで示されているように、「背中」が「後ろ」へと変化したのは、本来の解釈から、隣接する back of を一つの単位とみなす解釈へと移行したためだと捉えることが可能である。このようなプロセスは再分析 (reanalysis) と呼ばれ、Hopper/Traugott (2003) では類推 (analogy)³¹ とともに文法化の主要なメカニズムとされている³²。しかしこの例をメタファー(身体部位から空間表現へ)の視点から考察することも可能なことからわかるように、このような言語構造上の要因の背後にも、上で述べた意味的なプロセスが密接に関わっていると見える³³。

5. 文法化研究における近年の議論

以上ではこれまでの文法化研究のさまざまな立場を概観してきた。ここでは引き続き文法化研究に関わる最近のトピックスのいくつかを紹介してみたい。

³⁰ Hopper/Traugott (2003) に見られるように、近年これらのプロセスは、それぞれメタファー的プロセスとメトニミー的プロセスとして扱われる傾向にある。

³¹ Hopper/Traugott (2003) ではまたルール一般化 (rule generalization) とも呼ばれている。

³² なお再分析は、一般に生成文法的な言語変化の研究において、言語変化の主要なメカニズムと考えられている。そういった枠組みでは、次の世代の学習者が言語を学習する過程において、言語構造の再分析が行われることで言語変化が生じると仮定される。Hopper/Traugott のように、再分析を用いて文法化を把握しようとする研究者がいる一方、Haspelmath (1998) のように、文法化は再分析の考え方なしでも説明できるという主張もある。

³³ 文法化における意味的メカニズムと構造的メカニズムの果たす役割、およびその交互関係は、今後さらに検討する必要がある。その際には、構文の視点からのアプローチが重要となると思われる。そのような視点で文法化を捉えようとしたものには、Traugott (2003) がある。

5.1 文法化する際の意味に関連する議論 - 主観化 -

これまでの研究で、文法化の際には一定の方向性を持つ意味の変化が観察されることが指摘されてきた。そういった研究の中で、文法化の際に起こる一方向の意味の変化は「主観化」(subjektification) の方向へと向かう傾向があることが、近年指摘されてきている。この主観化の捉え方に関しては、Traugott と Langacker による、若干異なる二つの立場がある。ここではこの二つの立場を紹介する。

まず Traugott (1995) の言う主観化とはどのようなものだろうか。Traugott は主観化を、命題に対する話し手の主観的態度が、次第に表現の意味に取り入れられてゆく語用論・意味論的なプロセスだと考えている。例えば命題機能から談話機能への拡張は、そのような主観化の過程の一つとされる。このような拡張の例として次の例を見てみよう。この例では、to 不定詞句が持つ本来の機能である主文との目的関係の表示という命題的な機能から、自分の発言の前置きを示す、談話的機能への拡張が見られる。

- (9) a. He will go to New York to take part in the conference.
- b. To tell the truth, it is too expensive.

通時的に見て、(9b) のような用法は、(9a) のような用法から生じてきたと考えられる。これらの二つの用法を比較すると明らかなように、(9b) のような談話的な用法においては、表現自体に話し手の態度という主観的な要素が増加している。すなわちこの用法では (9a) の用法と異なり、明示されていない to tell the truth の主語は、常に話者になっている。

主観化の関わる他の過程としてはまた、非認識の意味から認識の意味への変化がよく知られている。例えば英語の「しなければならない」という義務を表す must から、「に違いない」という話者の主観性を伴う must への変化は、この例の代表的なものである。

そしてこのような主観化のプロセスのメカニズムとして、Traugott は話し手・聞き手の行うコミュニケーションの中で上のような形式が使用されるうちに、語用論的な推意によって、次第に主観的な意味が増大し

ていくという過程を想定している。

主観化についてのもう一つの見解は Langacker (1991, 2000) の認知文法の枠組みの中で提出されたものである。Langacker の言う主観化は、客観的に捉えられる事物や出来事の本来の意味が希薄化して、把握の背後にある概念主体 (conceptualizer) の視点が次第に前景化するプロセスと捉えられる。この過程の例として、英語の *be going to* を見てみよう (Langacker 2000:303 の例を若干変更)。

- (10) a. Sam was going to mail the letter but couldn't find a mailbox.
 b. Something bad is going to happen.

(10a) では、主語の物理的な空間的移動が表されている。しかしこの文が表現される際に含まれるのは物理的な移動のみではない。そこには主語が時間的な流れに沿って移動を行うという、概念主体の認知プロセスが同時に存在している。一方 (10b) では、もはや移動の意味は存在せず、状況を把握する主体の時間軸に沿った概念主体の心的な動きのみが存在する。この二つを比較すると、後者の意味は前者の意味のうちの空間的移動という意味が薄れ (attenuation) 物理的な移動の意味と共に存在していた時間軸に沿った心的な動きのみが残ったものと捉えることができる。Langacker の主観化は、このように概念主体の認知プロセスが顕在化する過程を指している。

ここで Traugott と Langacker の主観化の捉え方をもう一度まとめてみると、Langacker の主観化は、ある形式の意味にあらかじめ存在している認知主体の視点が浮かび上がる過程であるのに対し、Traugott の主観化は、ある形式に語用論的な過程を経て、それまでになかった主観的な意味が加わってゆく過程を指していると言える。ここで問題となるのは、両者が同じような現象を対象にし、同じ主観化という用語を用いているにもかかわらず、なぜこのような見解の相違が生じるのかという点である。この問題に対する解答は、分析の際の出発点の違いに求めることができる。まず Langacker が主観化を問題にする際には、概念主体がある出来事を概念化する場合に関わるすべての意味の側面が着目される。このような見方に立つと、主観的な認知プロセスは、どのよう

な発話状況にも常に存在する要素ということになる。それに対し Traugott は、ある一定の意味を有する形式に注目して主観化を捉えている。形式に着目して意味を捉えるならば、すでにその形式の意味として慣習化した意味と、また慣習化していない意味が区別される。そして慣習化していない意味、例えば主観的意味は、新しい意味として形式に加わると把握される。両者の相違はしたがって主観化を問題にする際に意味を出発点にするか、形式中心出発点にするかという相違だと考えられる。ある現象を分析する際にどちらの分析も可能となることが多い³⁴のは、両者の相違がこのような出発点の相違に起因するためだと思われる。

5.2 一方向性に関連する議論

以上で見たように、文法化研究の最も重要な主張は、文法化が一方向に進んでゆくということであった。これは古典的な研究として挙げた Givon、Lehmann や Heine/Reh などによって主張されてきたものである。しかし近年、この主張の妥当性に関して議論が行なわれている。例えば Ramat (1992) は、文法化に逆行する脱文法化 (degrammaticalization) と言える現象を多く集め、文法からレキシコンへという、文法化研究が仮定する方向とは逆方向の変化の可能性を指摘している。このような変化の例としては、以下のようなものが挙げられる。

(11) 脱文法化の例 (Ramat 1992)

- | | | |
|---------------------------|---|------------------------|
| a. fascism 「ファシズム」 | > | ism 「イズム」 |
| b. forget me not 「私を忘れるな」 | > | forget-me-not 「ワスレナグサ」 |

これらの例においては、拘束形態素が独立した語となったり(11a)、統語的な連鎖が語となったりしている(11b)。Newmeyer (1998:263ff.) はこのような例をさらに多く列挙し、文法化研究の一方向性の仮説を批判するための材料としている。これに対し Heine (2003) は、このような場合

³⁴ とはいえ概念主体の認知プロセスとしてだけでは捉えきれないような意味が推意によって生じ、ある表現の意味として慣習化するような場合には、Traugott の見方のみが当てはまることになる。Traugott と Langacker の主観化の捉え方の相違に関してはまた中村 (2004:21ff.) を参照。そこでも両者の相違がわかりやすく解説されている。

には文法化の際に見られるような規則的な方向性が観察されず個別的であり、全体的な割合からすると、文法化の一方向性の仮説は有効であると論じている。

また Haspelmath (1999) は、文法化の一方向性を支持する立場から、文法化がなぜ一方向に進み、逆行することはないのかに関して考察を行っている。Haspelmath はそれまでの文法化の不可逆性に関わる議論を詳細に検討した後、文法化が不可逆であるのは、話し手が「聞き手の注意を引くように話せ」という原則(目立ちの公理 *maxim of extravagance*)に従うためだとする³⁵。話し手がこのような原則に従うと、既存の表現手段とは異なる、目新しい表現手段を文法的な意味を表現する際にも導入するようになる。その際に目新しい表現が選ばれるのは、文法的な意味を担わない具体的な表現からである。目新しさを伴わない既存の文法領域からの表現を使っても、もはや他人の注意を引かないからである。このような理由により、文法化の際には具体的な意味を持つ形式化から、抽象的な意味を持つ形式への一方向の変化が起こり、またそれは不可逆となるとされる。また目新しい表現手段がその言語を話す人々の間に広まると、その表現の出現の頻度が高くなる。音声的な弱化はこのために生じてくると考えられている。

以上のように、一方向性の仮説に関しては、それに対する反論を含め近年様々な議論がなされているが、それによって文法化研究は確実に実りある成果を得ていると言えるだろう。

5.3 文法化と語彙化

レキシコンはしばしば文法と対立する領域と見なされる。文法化は新しい文法項目の成立に関わる変化であることはすでに見たとおりだが、レキシコンにおける新しい語彙項目の成立に関わる変化として、語彙化を挙げることができる。文法化への関心が高まる中、近年また語彙化も注目されてきている。しかし語彙化という用語は、これまで研究者によ

³⁵ この原則は Keller (1994) の「見えざる手理論」との関連で議論されている。この理論によると、言語変化は個人がこのような原則に従って行動した結果、あたかも「見えざる手」に支配されているかのように、意図せずして起こってくるプロセスと捉えられる。

ってさまざまに使われてきた³⁶。したがって語彙化をどのように把握するかが、まず大きな問題となる³⁷。また特に文法化研究の立場から見て問題となるのは、語彙化が文法化とどのように関係しており、また文法化との関連でそれがどのように捉えられるのかという点である。

文法化と語彙化に関する近年で最も包括的な研究である Brinton/Traugott (2005) は、領域は異なるものの、両者が音韻・形態的な融合が見られ、両者とも融合の方向に一方向に進んでゆくという点で類似する部分があることを指摘している。

また両者の関係に関する問題点としては、語彙化が文法化の逆方向の変化なのかという点が論点として挙げられる。これは上で見た一方向性の議論とも関わるものである。文法化に対する逆方向の変化は、上で見たように脱文法化と言われるが、これはまた語彙化が脱文法化とどのような関係にあるのかという問題とも言える。

この問題に関して、Ramat (1992) や van der Auwera (2002) は、脱文法化が文法からレキシコンへと変化する語彙化の一つと見なすことができ、それゆえまた脱文法化・語彙化と文法化は鏡像関係にあると考えている。このような見解に対し、脱文法化と語彙化は別の現象と考える研究者もいる。例えば Haspelmath (2004) は、語彙化が移行段階のない、いわば突然の変化なのに対し、文法化は移行段階を伴いつつ進行する点で異なるとしている。そのため仮に脱文法化があるとすれば、そこには文法化のような連続的な逆方向の変化が見られなければならないとする³⁸。

文法化と語彙化の関係に関してはまた Brinton/Traugott (2005) が、両者がどの点で類似しており、どの点で異なっているのかを詳細に検討し

³⁶ Brinton/Traugott (2005:18ff.) は、語彙化という用語が大きく分けて共時的な意味と通時的な意味で使われるとしている。共時的な意味での語彙化は、ある状況が言語にどのようにコード化されるのかに関わるものである。例えば日本語の「その瓶は洞窟の中へ漂って行った」は、英語では The bottle floated into the cave. となる。このため英語においては日本語で「行った」で表される移動の意味もが、float という動詞に「語彙化」されていると言われる。一方、通時的な語彙化は、新しい表現が、レキシコンに定着する過程を指すものである。文法化との関連では、特に後者の意味での語彙化が重要となる。

³⁷ 語彙化に関する詳細な議論は、Brinton/Traugott (2005) 第2章を参照。

³⁸ Haspelmath は、このような本当の意味での文法化の逆のプロセスを、反文法化 (antigrammaticalization) と呼ぶことを提案している。

ている。そして両者の類似点と相違点を以下のようにまとめている。

(12) 文法化と語彙化の平行性 (Brinton/Traugott 2005:110)

	語彙化	文法化
段階性	+	+
一方向性	+	+
形態的融合	+	+
音韻的弱化	+	+
動機付けの消失	+	+
メタファー・メトニミー化	+	+
脱カテゴリー化	-	+
意味の希薄化	-	+
意味の主観化	-	+
生産性	-	+
頻度	-	+
類型論的一般性	-	+

ここでわかるように、語彙化と文法化は共通点も多いものの、文法に特有の特徴(意味の希薄化や生産性など)に関しては、大きな相違があるといえる。また文法は類型論的にみて共通の方向性が確認されるが(類型論的一般性)、語彙化にはそのような傾向がみられないという点も興味深い。

文法化研究に比べ、語彙化はこれまでそれほど注目されてこなかったが、以上のように近年の議論は活発である。今後の発展で期待される課題としては、文法化と語彙化をセットとすることで、文法とレキシコンにおける言語変化を包括的する枠組みとなりうるのかといった問題があると思われる。その際には語彙化をどのように新しく規定するかが鍵となるだろう。

5.4 地域類型論と文法化

これまでの文法化研究においては、文法化はどちらかという個別言

語が自立的に文法化を引き起こしてゆく過程として捉えられてきた。しかし近年、個別言語内の要因だけでなく、それぞれの個別言語に隣接する諸言語との言語接触もまた、文法化を引き起こす要因として重要な役割を担っていることが注目されてきている。このような点に注目した研究の中で、最近の最も包括的な研究が、Heine/Kuteva (2005) である。この研究で Heine/Kuteva は文法の複製 (grammatical replication) という考え方を採っている。文法の複製とは、モデルとなる言語(モデル言語)の文法的な意味が、別の言語(複製言語)へと転用されてゆく過程を指すものである。このような転用の一例は、例えばブラジルのタリアナ語に見られる (Heine/Kuteva 2005:3)。この言語を話す若い世代は、ポルトガル語では疑問代名詞が関係代名詞としても使われるのを知っている。そのため若者たちは、本来のタリアナ語にはそのような用法はないにも関わらず、タリアナ語の疑問代名詞「誰」をポルトガル語に倣い、関係代名詞として使用している。ここで見られるのは通常の借用ではなく、文法的意味の転用の仕方が、他の言語に取り入れられるという過程である。Heine らは、世界の言語に見られるこのような文法の複製のさまざまな例を扱っている。

また Heine らによれば、この文法の複製が起こる際には、ある言語に見られる文法化の概念や構造の過程がそのまま他の言語にも取り入れられ、複製言語においてもモデルとなる言語と同じような過程を経て、文法化が引き起こされることを指摘している。また文法の複製がいったん始まると、それは通常の文法化と同じように一方向に進行することを明らかにしている。

これまで言語接触の研究においては語彙レベルの借用はよく問題にされてきたが、その際文法はあまり影響を受けないかのように考えられてきた。しかし文法が転用される場合も実際はまれではないことを指摘し、文法化研究と結びつけたことが、Heine らの大きな功績であろう。世界の言語において、さらにどのような文法の複製が見られるのか、また文法化におけるこのような地域的要因と個別言語的要因、さらには言語普遍的な要因がどのように互いに関わっているのかなど、この分野にも課題はまだ多くあると思われる。この分野のさらなる展開が期待され

る³⁹。

6. 今後の文法化研究の展望

以上で文法化研究のこれまでの発展を俯瞰してきたが、ここでは今後の文法化研究にさらにどのような余地が残されているかに関する私見を簡単に述べて結びとしたい。

まず記述的な側面としては、さまざまな個別言語を対象にした、さらなる一方向性の調査を行う余地が残されている。例えば Heine/Kuteva (2002) には取上げられてはいないものの、日本語には通時的に見て次のような変化が知られている。

(13) 日本語の格標識における文法化の方向

へ(「端・境界」) > へ(方向標識) EDGE > ALLATIVE
が(属格標識) > が(主格標識) GENITIV > NOMINATIV

このような変化が世界の言語にどの程度観察されるかは、必ずしも明らかではないが、比較的好く知られている言語である日本語の文法化の道筋に関しても、類型論的な文法化研究の際にはまだ十分に考慮されていないのが現状である。日本語だけでなく、比較的長期に渡る通時的資料の存在する言語における文法化の道筋の比較に関しては、まだ十分に研究の余地を残している⁴⁰。

また文法化に際の認知メカニズムに関しても、さらなる詳細な分析が可能だと思われる。これまでの研究では、ある領域から別の領域への文法化の一般的な過程は明らかになっているが、具体的にどのような場面でそのような拡張が生じたのかは、それほど問題とされていないようである。しかし通常の場合、意味の拡張は当該の形式の本来の意味とコンテキストとの相互作用で引き起こされる。したがって個別の文法化の起こるコンテキストの分析と分類、および意味拡張の背後にある詳細な認

³⁹ このような方向でヨーロッパの言語を中心に扱った研究が Heine/Kutiva (2006) である。

⁴⁰ 日本語を対象とした文法化研究も近年増えてきている。文法化をタイトルの掲げた初期のものとしては、Ohori (1998) や日野 (2001) がある。

知的メカニズムの解明とその分類は、今後の文法化研究を精緻化する上で重要な点となると考えられる。

また文法化理論の要ともいえる、一方向性の仮説の精密化も課題として挙げられる。これまで通言語的に観察される、さまざまな文法化の道筋が指摘されてきたが、なぜある言語ではあるタイプの文法化が起こり、ある言語では起こらないのか、という点に関する考察は、いまだ必ずしも十分ではない。したがって今後の課題となるのは、複数の言語で同様の文法化が起こる背後に、なんらかの共通の要因があるのかという点に関する考察であろう。仮にそういった要因が見つかるなら、その要因がある文法化を引き起こす言語と、そうでない言語を分けている可能性がある。文法化を引き起こす要因となるそのようなパラメータが発見されるならば、そのパラメータがある言語に確認できるかどうかによって、ある文法化がある言語において引き起こされるか否かをあらかじめ予見しうる可能性がある。そのようなパラメータの有望な候補としては、基本語順や、トピック優位言語・主語優位言語の相違、個別言語の体系の中の競合する形式との関係などが考えられる。このような研究がさらに進めば、言語がどのように変化するかが、ある程度予測できるようになるかもしれない。

最後に文法化研究の応用の可能性もある。文法化研究は文法がどのように生まれてくるかに関する分野である。したがってこの立場を逆に利用することで文法の起源についての考察を行うことも可能であろう。またさらに文法化理論を利用してコンピュータシミュレーションを行い、理論がどの程度有効なのかを確かめるといった方向の研究も可能だと思われる。

このように文法化研究は、文法がどのように生まれ、またなぜ現在のそのような姿をしているのかという問いかけに、より正確な解答を与えるべく、さらに進歩してゆくとと思われる。

参考文献

文法化研究は個々の文法領域に関してもさまざまな発展を遂げているが、ここでは本文中に登場した文献と、文法化研究の基本的な文献を挙げるに留める。さまざまな文法領域についての文献は、Heine/Kuteva (2002) の文献一覧等を参照されたい。

Behaghel, Otto (1923-1932): *Deutsche Syntax: eine geschichtliche Darstellung*. Heidelberg: Carl Winter.

Bisang, Walter (1998): Grammaticalization and language contact, constructions and positions. In: Ramat and Hopper (eds.), 13-58.

Brinton, Laurel J./ Elizabeth C. Traugott (2005): *Lexicalization and language change*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bybee, Joan/ Revere Perkins/ William Pagliuca (1994): *The evolution of grammar. Tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: The University of Chicago Press.

Diewald, Gabriele (1997): *Grammatikalisierung. Eine Einführung in Sein und Werden grammatischer Formen*. Tübingen: Niemeyer.

- (2002): A model for relevant types of contexts in grammaticalization. In: Diewald/Wischer (eds.), 103-120.

Diewald, Gabriele/ Ilse Wischer (eds.) (2002): *New reflections on grammaticalization*. Amsterdam: Benjamins.

Fischer, Olga/ Muriel Norde/ Harry Perridon (eds.) (2004): *Up and down the cline – the nature of grammaticalization*. Amsterdam: Benjamins.

Giacalone Ramat, Anna/ Paul J. Hopper (1998): *The limits of grammaticalization*. Amsterdam: Benjamins

Givón, Talmy (1971): Historical syntax and synchronic morphology: an archaeologist's field trip. In: *Chicago Linguistic Society* 7, 394-415.

- (1979): *On understanding grammar*. New York: Academic Press.

Hagège, Claude (1993): *The language builder: an essay on the human signature in linguistic morphogenesis*. Amsterdam: Benjamins.

Haris, Alice/ Lyle Cambell (1995): *Historical linguistics in cross-linguistic perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Haspelmath, Martin (1998): Does grammaticalization need reanalysis? In: *Studies in Language* 22, 315-351.
- (1999): Why is grammaticalization irreversible? In: *Linguistics* 37, 1043-1068.
- (2004): On directionality in language change with particular reference to grammaticalization. In: Fischer et al. (eds.), 17-44.
- Heine, Bernd (2002): On the role of context in grammaticalization. In: Diewald/ Wischer (eds.), 83-101.
- Heine, Bernd (2003a): Grammaticalization. In: Joseph/ Janda (eds.), 575-601.
- (2003b): On degrammaticalization. In: Blake, Barry J./ Kate Burridge (eds.): *Historical Linguistics 2001. Selected papers from the 15th International Conference on Historical Linguistics*, Melbourne, 13–17 August 2001, Amsterdam: Benjamins, 163-179.
- Heine, Bernd/ Tanja Kuteva (2002): *World lexicon of grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2005): *Language contact and grammatical change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2006): *The changing languages of Europe*. Oxford: Oxford University Press.
- Heine, Bernd/ Ulrike Claudi/ Friederike Hünemeyer (1991): *Grammaticalization: a conceptual framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Heine, Bernd/ Mechthild Reh (1984): *Grammaticalization and reanalysis in African languages*. Hamburg: Buske.
- Hopper, Paul J./ Traugott, Elizabeth C. (2003): *Grammaticalization*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Joseph, Brian D./ Richard D. Janda (eds.) (2003): *The handbook of historical linguistics*. Oxford: Blackwell.
- 風間喜代三 (1978): 比較言語学の誕生：比較言語学小史．岩波書店．
- Keller, Rudi (1994): *Sprachwandel. Von der unsichtbaren Hand in der Sprache*. Second edition. Tübingen: Francke.
- Langacker, Ronald (1991): Subjectification. In: *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.

- (2000): Subjactification and grammaticalization. In: Langacker, Ronald: *Grammar and conceptualization*, Berlin/New York: de Gruyter, 297-315.
- Li, Charles N./ Sandra A. Thompson (1974): An explanation of word order change SVO SOV. In: *Foundations of Language* 12, 201-214.
- Lehmann, Christian (1985): Grammaticalization: synchronic variation and diachronic change. In: *Lingua e Stile* 20, 303-318.
- (1989): Grammatikalisierung und Lexikalisierung. In: *Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung* 42, 11-19.
- (1995[1982]): *Thoughts on grammaticalization*. München: LINCOM.
- (2002): New reflections on grammaticalization and lexicalization. In: Diewald/ Wischer (eds.), 1-18.
- Matsumoto, Yo (1988): From bound grammatical markers to free discourse markers: history of some Japanese connectives. In: *Berkeley Linguistic Society* 14, 340-351.
- Meillet, Antoine (1958): L'évolution des formes grammaticales. In: Meillet, Antoine: *Linguistique historique et linguistique générale*. Paris: Champion, 130-148.
- Newmeyer, Frederick J. (1998): *Language form and language function*. Cambridge, Mass: The MIT Press.
- Ohori, Toshio (ed.) (1998): *Studies in Japanese grammaticalization: cognitive and discourse perspectives*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Ramat, Paulo (1992): Thoughts on degrammaticalization. In: *Linguistics* 30, 549-560.
- Roberts, Ian/ Anna Roussou (1999): A formal approach to grammaticalization. In: *Linguistics* 37, 1011-1041.
- (2003): *Syntactic change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stein, Dieter/ Susan Wright (1995): *Subjectivity and subjectivisation in language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, Eve E. (1988): Grammaticalization and semantic bleaching. In: *Berkeley Linguistic Society* 14, 389-405.
- (1990): *From etymology to pragmatics: metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Traugott, Elizabeth C. (1982): From propositional to textual and expressive meanings: some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In: Lehmann, Winfred P./ Yakov Malkiel (eds.) (1982): *Perspectives on historical linguistics*. Amsterdam: Benjamins, 245-271.
- (1989): On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. In: *Language* 65, 31-55.
 - (1995): Subjectification in grammaticalization. In: Stein / Wright (eds.) (1995), 31-54.
 - (2003): Constructions in grammaticalization. In: Joseph/ Janda (eds.), 624-647.
- Traugott, Elizabeth C./ Richard B. Dasher (2002): *Regularity in semantic change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C./ Bernd Heine (eds.) (1991): *Approaches to grammaticalization*. Vol. 1. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth C./ Ekkehard König (1991): The semantics-pragmatics of grammaticalization revisited. In: Traugott/ Heine (eds.), 189-218.
- Ullmann, Stephen (1962): *Semantics: an introduction to the science of meaning*. Oxford: Blackwell. (池上嘉彦訳 (1969): 言語と意味 . 大修館書店)
- van der Auwera (2002): More thoughts on degrammaticalization. In: Diewald/ Wischer (eds.), 19-29.
- van Gelderen, Elly (2004): *Grammaticalization as economy*. Amsterdam: Benjamins.

日本語で読める文法化関連の文献

- 『月刊言語 - 文法化とはなにか 言語変化の謎を解く』 2004年4月, 第33巻 .
- 『日本語の研究』 2005年7月, 第1巻第3号 .
- 秋元実治 (2002): 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房 .
- 秋元実治編 (2001): 『文法化 - 研究と課題』 英潮社 .
- 大堀俊夫 (2002): 『認知言語学』 東京大学出版会 .
- 河上誓作編 (1996): 『認知言語学の基礎』 研究社出版 .

中村芳久編 (2004): 『認知文法論 II』 大修館書店 .

日野資成 (2001): 『形式語の研究 - 文法化の理論と応用』 九州大学出版会 .

ホッパー, P.J./E.C.トラウゴット (日野資成訳) (2003): 『文法化』 九州大学出版会 .

(みやした ひろゆき)

MIYASHITA, Hiroyuki: What is the study of grammaticalization?